

國學院大學学術情報リポジトリ

基調講演 考えて書く力の育成： 高大連携に向けた大学教育の課題

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井下, 千以子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001322

〔基調講演〕

考えて書く力の育成

―高大連携に向けた大学教育の課題―

桜美林大学リベラルアーツ学群教授

井下 千以子

はじめに―自己紹介と本講演の概要―

桜美林大学の井下でございます。今回は、共に勉強をする機会を与えていただきましたことをたいへん光榮に思っております。どうぞ宜しくお願いします。

まず、自己紹介から始めたいと思います。私の専門は心理学です。卒論は思考の発達に関する研究で、それから博士論文まで一貫して、思考がどのように発達するか、教育するか、ということテーマにして参りました。思考は、頭の中の活動

であり、見ることはできません。それを外在化するものとして、「書く」ことは、頭で考えたことを書き出すということでもあります。そのことがライティング教育の研究に繋がり、大学で実践してきました。

昨日の生涯発達心理学の

授業では「言葉の発達」ということを取り上げました。言葉の働きの中には、情報の伝達の他に、思考のツールであることとか、あるいは行動の調整、例えば、バスの運転手さんが「右よし、左よし」と言うような形で自分の行動を調節するのに使ったりとか、あるいはアカデミック・ライティングの他にも、小説とか、俳句とか、自分の感情を表すことなど、大切な役割があります。

言葉は、そうした情報や考え、感情を表すものでもあります。一方、LINEのように、言葉ではなく、スタンプを「ぽん」と送ることによって、自分は嬉しいとか、びっくりしたとかというように感情を相手に伝えます。最近の学生たちのコミュニケーションの手段としては、言葉ではなくて、そういったスタンプというような絵文字のようなものも、彼らにとっては大事なツールになってきています。そのように、社会や文化や時代によっても、「国語力」、「言葉の力」、求められるものは違って来ているのではないかと思っています。

今回は、「高大接続」というテーマですので、私自身、高校教育とどこまで関わりがあったか、ということ



考えてみました。十数年前になるのですが、京都大学大学院教育学研究科に非常勤として教えに行くという機会がありました。その中には、いわゆるアカデミックなコースとして研究者を目指すというコースの他に、現場の高校の先生が、サバティカルとして一年間休暇を京大で研究をし、論文を仕上げるというコースがありました。そこで、誰か論文を指導してくれる人はいないだろうかというようなことになり、私にやってほしいという依頼がありました。四年間、京大へ東京から通いました。現職の高校の先生方、国語の先生方もいらつしやいましたし、理科も社会も、英語の先生もいらつしやいました。先生方が、そこで実践知はたくさん持っているのですが、それを研究として、どのように論文にしていっただいいのかというようなことで、非常に苦勞をしておられました。

後でご紹介申し上げますが、私が書いたテキスト『思考を鍛えるレポート論文作成法【改訂第二版】』（慶應義塾大学出版会、平成二十五年）の第四章「論文を書く」にあるのですが、それはまさに、京大の学生さんたちに実際に指導をすることによって、内容が、かなり煮詰まっていたと思っています。実際に授業を通して高校の先生方も、「論文を書くことも分かったが、井下先生の指導の仕方が、自分の高校での教育を振り返る機会にもなった」というような感想を寄せて下さいます。その感想につきましては、後でご紹介します本にも載っていますので、そちらをご覧くださいと思います。

次に、桜美林大学では、AO入試に合格した高校生のために二〇〇八年と二〇〇九年に行ったプログラムを紹介します。AO入試で入学が決まった高校生たちに勉強する機会を作ってく

れないかというような要望が高校側からありました。その頃私は、基盤教育院というところに所属しておりました。「高校と大学の接続とは何か」という観点から、どう入学前教育を行ったのかというお話をしていきたいと思います。

二〇〇七年ぐらいから、だんだん日本の大学に、初年次教育が普及してきたと思いますが、その頃に基盤教育院で、初年次教育、英語では「First Year Experience」ですので、それをそのまま授業のタイトルにしました「大学での学びと経験」という授業を立ち上げ、開発をし、十年間、プログラムは続いています。そのプログラムの中にも、初年次におけるアカデミック・ライティングが、五コマのうち五コマ入っています。その五コマをどのように実施していくのかということが、先ほどご紹介したテキストの第三章「レポートを書く」であり、授業で行っている内容です。どう大学では課題が要求されるのかを、大学に入ったらばかりの学生さんに自覚的になつてもらうという意味合いも含まれていますので、高校生も視野にいれて、最初の部分は、高校教育でも使えるのではないかなと思っています。

そうしましたら、東北大学に「PDP（Professional Development Program 専門性開発プログラム）オンライン」というプログラムがあり、私の「アカデミック・ライティングを指導する」という講義が、今、動画としてアップされています。そこで講義をしたときに、実際にフロアに聞きにきた先生もいまして、その様子は残念ながらアップされていないのですが、高校教員の方もたくさんいらして、様々なご意見をいただきました。先生の中には、自分は生徒に、様々なことを調べて、その調べた内容を基に、根拠に基づいて、自分の意見を展開し

ていくというようなことを実践的にやっておられ、かなり研究に近いようなことを生徒たちに学ばせている実践を、感心して聞きました。

今日の主な内容は、まず、高校と大学の接続とは何かを、私が桜美林で実施した入学前教育の事例から考えてみたいと思います。二つ目は、確かな国語力をつけることを目指して、知識や技術の習得を基盤として、「考える力」を育むという観点から、「書く力の育成」に焦点を当てた、アクティブラーニングによる授業を紹介したいと思います。三つ目に、どういう学生、生徒を育てたいかという認識を先生方と共有して、現状の問題と今後の課題を共有するきっかけとしたいと思います。

海外におけるライティング指導の状況

二〇〇九年に科学研究費〔FD活動の一環としてのライティングセンターの機能開発に関する研究〕を取りまして、ライティングとクリティカル・シンキングというようなことを中心に、これまで国内外の大学を中心に訪問調査をして参りました。国外では、主に北米、カナダを中心に調査をしてきました。それには理由があります。私は、ライティング・アクロス・ザ・カリキュラム (Writing Across the Curriculum) といふことで、つまり四年間全体に亘って、ライティング・アンド・リーディング・アクロス・ザ・カリキュラムというように、ライティングだけではなくリーディングも入るのですが、それを実践しているというような論文をいくつか読んだのですが、実際に国外でそれがどう行われているのか、ホームページを見ただけでは

わかりませんでした。二〇〇九年にカナダのモントリオールで国際初年次教育学会のカンファレンスがあり、そこで私は発表しました。会場のホテルから歩いて十五分の所に、カナダでも五本の指に入るマギル大学という所がありまして、そのライティングセンターを訪問しました。私が訪問したのは六月だったのですが、その八月にライティングセンターはクローズとすると二十何年間続いてきたライティングセンターが閉じられる。マギル大学は研究大学なので、今後はドクターコースの学生を中心にライティングを指導するとのことでした。その先生は、底辺層にいる学生を擲り上げていくことを一生懸命やることに意義を感じておられたので、今までの二十何年間は何だったのか、私が訪問した時には、もう疲れた、がっかりしたというお話をしておられました。その時に、ライティング・アクロス・ザ・カリキュラムを、カナダで一生懸命やっているところはどこかということをお聞きしたのです。そうしたら、自分の研究仲間、アルバータ大学にそれをやっていて、全学的に展開をしている所があるというようなことで、それでアルバータ大学に行きました。そのアルバータ大学ではどんなことをやっているのかということは、この講演の最後のところでお話をしたいと思います。

二〇〇九年の頃は、FD活動を推進するということが、大学教育の中心的な話題でもありましたので、学生のライティングを高めていくために、教授団はどのように学内で展開していけばよいのかということのモデルになればいいかなというように、ライティング・アクロス・ザ・カリキュラムということが、どう行われているかということを見てきたわけです。

次の科研では、「ライティングスキルズ育成を軸としたキャリア教育の質保証に関する国際連携研究」ということでした。

先ほどもこの講演が始まる前に、他の発題者の先生方と打ち合わせをした時に、確かな国語力をつけて、社会貢献が出来る人材となって欲しいと言っておられた国語の先生がおられ、まさしく私もそのように思っていて、考えて書く力をつけることによって、大学での学びが充実し、さらにそれが、自分のキャリアに繋がっていく。その質の保証をするにはどうしたらいいかというようなことで、カナダに加え、オーストラリアの大学等を見て来ました。しかし、海外の大学が進んでいるかというところ、決してそうとも言えず、あとでアルバータの例も挙げますが、全学に行くことは本当に難しいことです。ブリティッシュコロンビア大学は、カナダの中でも特に大きな大学なので、そのFDセンターの先生に、色々お話を伺いましたが、やはり全学的に展開していくということは難しいということを感じています。

「高大接続システム改革会議」の最終報告

そういう中で、日本ではどのように大学教育をこれから発展させていけばいいのかというようなことで、最近注目されていますのが、文部科学省の「高大接続システム改革会議」の最終報告（平成二十八年三月三十一日）です。

高大接続改革システムの考え方は、まずは知識と技能を身につけた上で、それを基盤として思考力、判断力、表現力をつけ、主体性を持って、多様な人々と共同して学ぶ態度を養うという

ような、まさしくアクティブラーニングということになります。大学教育では、主体性を持つてということを入学者に期待をしているということですので、そうすると、こういう力をつけていくために、高校教育においては、どういう教育を充実させていったらいいのかということになります。そして、このようなアドミッションポリシーをもって、どのようにカリキュラムを充実させ、さらに、どう社会に貢献する学生とするか、あなたはここまで学びましたね、というような形で卒業を認定していくかということを考える上でも、国語力をどう捉えていくかということとは、まさに思考力、判断力、表現力であり、国語力がいかに重要かということがわかりただけなのではないかと思えます。

そして、知識、技能を基盤として、思考力、判断力、表現力と、それらを評価する方法のイメージとありますが、今までのセンター試験というのは、いわゆる穴埋め式で、選択肢の中から選ぶというようなものであったわけです。つまり、答えが特定されている。言葉は書かなくていい。丸をつけるというか、鉛筆で埋める作業だったわけです。やはりそれでは、思考力は育っていかないのではないかというようなことが問題になり、これから新しくやっていくというものの中には、連動型として、複数の選択の他に、記述問題を入れていくとか、或いは、短い文でもいいから、自分で書いて答えさせようとか、小論文とか、自由度の高い記述式までいなくても、ある程度条件をつけて、この図を見て説明しなさいとか、この文を要約しなさいとか、この問題についてあなたはどのように思いますかというような条件をつけて記述させるような形にしていこうではないかとい

うようなことになっている訳です。これが大学の入学試験の中心になるとすると、高校では、これに向けてどういうふうな国語力をつけていくか。つまり、社会であっても歴史であっても数学であっても、答え方が、言葉を用いて考えながらでなければ、答えられないというようなことになってくると、高い国語力が求められる訳ですし、また、大学の方でも、高校に対して、どういふふうなことを期待しているのか、そして、こういう試験を受けてきた学生を大学の側は、どう受け入れて伸ばしていくのかということも問題になってくるのではないかと思います。

各教科において求められる諸能力の育成において重視すべき学習プロセスと、評価すべき具体的な能力ということで、国語において重視すべき学習プロセスというふうなものも、「高大接続システム改革会議」の資料として出ております。多様な見方や考え方が可能な題材に関する文章や図表から得られる情報を整理し、概要や要点等を把握すると共に、他の知識も統合して比較し推論しながら、自分の考えをまとめ、他の考えとの共通点や相違点を示しながら、伝える相手に、状況に応じて適切な合意、表現、構成、文法を用いて、効果的に伝えることということ入っています。注意すべきところは、情報を収集する力、そして、収集した情報を整備し、解釈し、要約をして、それを統合して頭の中で、これはこうではないかというふうな感じで推量した結果、自分の意見はこうであるということ、根拠を示しながら、論理的に問題を解決していく力というふうなことで、まさに国語力と、言葉と思考力というのは、切っても切り離せないものというふうなことがわかりいただけるのではないかと思います。そして、さらにその資料の中に、高等学校の

基礎学力テストを活用した、高等学校教育におけるPDCAサイクルの構築という、現状における課題、学校外での勉強をどうするかという問題がいくつか挙げられています。それを課題解決に向けて、PDCAのサイクルで行い、そのDOのところで、アクティブラーニングの視点から学習の充実を図るとともに、多様な教育活動を展開する必要があるというふうなことが述べられています。アクティブラーニングに関しましては、後で私見と私の実践を交えて、お話をしたいと思います。

イニシエーションとしての入学前教育

以上、高大接続システム改革会議におけるいくつかの資料を基に確認して参りました。そういうものが非常に理想的なものとして掲げられているわけですが、それでは、現場ではそれを、どう噛み砕いて受け止めていけばいいのかというふうなことを考えていきたいと思っています。

入学前教育やオープンキャンパスなど、多様な取り組みが行われていると思います。やはり、オープンキャンパス等では、学生さんに来るだけ、大学の良いところを見てもらおう、それから大学に対して良い印象を持ってもらおうという目的で行われていると思います。それは当然だと思います。オープンキャンパスに来る学生さんは、まだ入学を決定していない。一方、AOで入学を決定した高校生を対象として入学前教育を提供していったらいいかということが問題になってきます。そうすると、オープンキャンパスとは異なる取り組みが必要となります。つまり、そのプログラムに参加してすごく楽しかったとか、友

だちが作れたとか、大学の授業が楽しみとかというようになるような入学前教育をデザインしてほしいという大学側の期待を受けてプログラムを作ったのです。それでやってみたのですが、これは本当に大学でやることなのかということが、疑問に残ったのです。しかし、学生たちは、その入学前教育に対して、とても楽しかった、良かったという感想だったのです。

それで私は、これは検証しなければいけないと思いました。検証した結果、行き着いたのは、イニシエーションのない入学前教育は意味がないということでした。イニシエーションというのはどういうことかというところ、これは文化人類学の中の用語なのです。一人前の大人と、社会に認められるための儀式を指します。そうすると今、日本では、成人式という儀式がありますが、千葉県浦安市の成人式は東京ディズニーランドで行っています。毎回NHKのニュースにもなります。私は不思議だなと思ってみています。ピーターパンはネバーランドに、大人になりたくない子供を連れ去って行ってしまったのに、そういう所で大人になるための成人式を行うという。つまり、セレモニー化しているわけです。まあ楽しみ、ミッキーやミニーに会えてうれしいと。それは逆行でしょう、不思議だねという話を生涯発達心理学の授業で学生にします。本来ならば、文化がまだ発展途上にあるような国においては、例えば、バンジージャンプのように、高い所から足に縄をつけて飛び降りることが出来たら、その勇氣を持つことができた、その次の日からあなたは大人。或いは、重い甕を頭の上に乗せて、遠い所まで水汲みに行き、その水を頭の上に乗せて帰って来られたら、その次の日から、あなたは大人というようなことで、難行とか苦行

とかに耐えて、それが出来た時に、大人社会への仲間入りが許されて、大人としての自信と誇りを持つことが出来る。それが、イニシエーションなのです。

そうであるならば、大学教育におけるイニシエーションとしての入学前教育が必要なのではないか。楽しい、嬉しい、何か良いことがありそうというだけで大学に入って本当に良いのかと思いました。大学生になるためのハードルを設けることも必要なのではないか。ハードルを認識出来て、四月から始まる学生と、出来ないまま、ほわほわと入って行く学生とでは、やはり大学生活や学問に向かう姿勢が違うのではないかと思います。

「学問の世界へようこそ」という企画

ただ、二〇〇八年の時のブリッジスクールというのは、当局の方から、楽しい、大学が好きになる、みんなと仲良くなる。大学に適応的になるということをやって下さいと頼まれたのです。それで、AO入試に合格した学生に、三日間使って、二つのグループに分け、大学生活への適応と、大学での学習への導入を行いました。その後、検証を行いました。ブリッジスクール実施後のアンケートの結果は、二〇〇八年の時は、とても良かった、とても楽しかった、先輩からのメッセージもとても良かった、ブリッジスクールに来て良かったと思ったという。しかし、本当にそれで良いのかということを私は疑問に思ったので、そのブリッジスクールに参加した学生に対して、入学半年後の九月、フォーカスグループインタビューを行いました。

フォーカスグループインタビューは、大体八人ぐらいの学生を一グループとしまして、その入学前教育を受けた結果、現在大学生となってみて、入学前教育をどのように自分は評価するかというインタビューを行いました。その結果、「ある程度入学前の不安は解消されたが、楽しいだけでなく、大学の授業がどのようなものかを知っておくと良かった。授業が難しいと感じることも必要だ。簡単だ、安心だと思うことが、入学後のストレスを無くすことにはならない。この程度かと思ってしまう、春休みにもっと英語の勉強をすれば良かったと授業が始まってから感じた」という回答を得ました。そこで、二〇〇九年の入学前教育では、全学群に向けたプログラムとして、適応とか導入だけではなくて、大学というところは学問を行うことなのだという、学問への誘いというような内容を入れたプログラムを作りました。「学問の世界へようこそ」というタイトルで、「学問の扉」は、²問い³によって開きますと、まさしく問うて学ぶものであることを示しました。

「認知心理学の扉」

それで、大学生活の適応や学習への動機付けを狙った二〇〇八年のイベントから転換を図ったわけです。大学での学び方を意識化させるプログラムへ。学問をする態度を育む一步として、既成の学問領域に限らず、日常の問題関心から問いを立てて探求することはどういうことなのかということを経験を通してもらう取り組みを行いました。ということで、先生方に、一クラス、十五人前後という形で授業をお願いしました。

私の担当した授業では、「認知心理学の扉」というタイトルで、人はなぜ考えることができるのかということを、一時間半ではなくて一時間ぐらいでやりました。始める前にグループを作ります。そのグループを私が作るのではなくて、みんなでその場で決めます。それで、ラインナップということをやっています。まず、四月から始まって、ぐるっと誕生日順に並んで下さいと言います。みんな立ってと言うと、もやもやと立って、「はい、何分で出来るかな」「大抵五分ぐらいで出来るんだけどな」と言うのと、声を発しなくては、言葉を発しなくては駄目だということとを誰かが気付き、「はい、私は六月何日です」とかという子がいると、その子が六月何日はこの辺ぐらいかな、という感じでいくと、みんなが何月とか、隣の人に聞いて、だんだんと出来上がっていった、五分以内に並ぶことができます。私は他の授業でもこういうのをやっているのですが、結構、五十人ぐらいでも、五分ちょっとぐらいで並びます。

こうしたゲームを通してながら慣れ親しんでいくというように感じて、グループに分かれて、私が講義をする前に、伝言ゲームをやってもらいます。まずは一列に並んで、そのグループでどのぐらい伝えられるかというような伝言ゲームの内容を作っておくのです。その伝言ゲームの内容の中には、桜美林大学では、「GO (Global Outreach) プログラム」といって、四年間のうちの二年か三年の時に、何ヶ月間かアメリカの大学で学習するというのをやっているのですが、その「GOプログラム」に参加したとか、午前中はリーディングとライディングがあり、午後はダウンタウンに行つて、何というアイスクリーム屋さんだったか、私も思い出すことが出来ない難しい、横浜みなとみ

らいにあるアイスクリーム屋さんの名前があるのですが、そこに行つてアイスクリームを食べたという内容を入れるのです。そうすると、みんなは「GOプログラム」を初めて聞くので、まず「GO」かどうか分からない。でも、リーディングとライディングをやったというのはわかる。あと、アメリカの何とか大学、何とか大学もなかなか思い出せない。ましてやそのアイスクリーム屋さんの名前も難しいと、かなり後ろの方になつていくと、短くなつていくのと同時に、思いもよらない内容になつていくというふうなことになるわけです。そうすると、私たちは、ちゃんと理解して聞いたつもりでも、なかなか短時間に頭の中に記憶しておくことが難しいだけでなく、自分が持っている知識とか経験に基づいて、記憶が変容していくということがわかるわけです。伝言ゲームをした結果から、自分が知らないことをどのようにして覚えようとするのか、考えようとするのかということも、私たちはどのようにして、自分たちの知らないことを覚えていくことができるのかということを、自分たちで推論してもらいます。その推論から、自分たちの具体的な結果から、一般化までの道筋を作ってもらつて、発表してもらうということをやります。

その発表を受けて、私が、心理学の記憶研究ではこういうことが行われている。その記憶研究というのは思考の研究に繋がつていて、私たちはなぜこんなにたくさんさんのことをこの頭の中に貯えておくことができるのかというお話をします。チャンク化ということ、纏まりを作っていくことによって、様々なことを構造的に憶えていくことが出来るという話をいたします。そうすると、授業の最後に感想を書いてもらうのですが、高校



生たちは、「憶えているときは何も考えていないようで、重要度の判断等に気付いてはいなかったが、自然と思考回路は回っているということが分かりました」「人に伝えようとしていることが、自分が既に持っている知識や考えで大きく変わってしまふと知って驚きました」「入学後にもこのようなコミュニケーションタイプの授業をやってくれるといいなというふうに思いました」と書きました。これに対して私は、「記憶の変容から人間の思考について考えました。短時間だったのに、結果の一般化までこぎつけたのは素晴らしい」とメッセージを寄せています。本当に素晴らしく、みんな協力してやって、それが出来たというような充実感、達成感にも繋がっていました。

そうすると、その授業を行った、他にも哲学の教員とか、リベラルアーツですので、理系の教員もいれば、歴史の教員もいます。日本語教育の先生もいたりというようなことで、皆さんそれぞれ、自分の専門に基づいた授業をやってもらいました。それに対して、普段何気なく、見たり聞いたりしていることも、別の角度からすれば学問になっていくというようなことに気付いたというようなことを、例えば日本語教育の先生が、「は」と「が」の違いについて授業の中で、学生たちに考えさせることで、普段自分たちは、「は」と「が」をどういうふうに使っているのかということを、改めて学問として取り組もうと思うと、それをどう説明すればいいのか、知らない人にどう説明すればいいのか、というような形で、まさに自分にとって、「学ぶ」という、学問というテーマの重要性が、再認識されたことが高校生の様子に見られるということが分かりました。

この取り組みの成果というのは、高校生に学問の入り口に

入ってもらって、大学の授業というのはどういうものなのかということ意識させることが出来たということと、最初の年は、いわゆるアンケート調査だけだったのですが、その後、フォーカスグループインタビューという、定性的調査、質的調査を組み合わせたことによって、入学半年後の調査から、実際にそういった学生の自発的な態度を引き出すということが出来たというようなことで、学生だけでなく、それは担当教員とか、スタッフの学生にとっても、たいへん意味深い取り組みとなりました。

入学前教育から初年次教育へ

桜美林大学は研究大学ではなくて、教育大学、教養大学であるわけですが、そうした大学においても、専門をどう教えていくかが重要で、大学教育とは何か、つまりハードルを下げて、大学にスムーズに入ってきて、というのが、今までの初年次教育の流れであったと思うのですが、学生が躓かないように石を全部取り除いてあげることが本当に学生を伸ばすことなのではなくて、たまにはハードルを上げて躓いたことから、やはり難しいんだということを感じてもらい、そういう中から、解答がないような問題にも取り組んでもらう。多様な解があることを学ぶというようなことを、自分が例えば心理学が専攻であっても、様々な他の学問を取ってみる。そういう幅広い教養の中から、世の中を広く深く捉えていくというようなことを大学で学ばせていくことが重要なのではないか。それは、入学前の入り口で知ってもらうということで、高校との接続を図っていくというような取り組みを目指したものでした。

今の大学入試は、何をどれだけ知っているかということが問われる訳なので、やはり高校までの教育の中では、知識の積み上げというようなことが、非常に重要かと思えます。基礎から応用へとということで、知識の学習、それも効率的にそれを行うということによって、大学入学への成果へと繋がっていく訳なので、知識の積み上げは重要なのですが、なかなかその知識の積み上げも動機付けがなければうまくいかない。例えば桜美林に来る学生の中には、自分の書いたレポートも発表の場になって読めない。なぜならば、「コピペ」をして書いた部分があつて、その漢字が読めないとかというのがないわけではない。漢字は高校までにやってきて欲しい、或いは自分で調べる力をそこでつけて欲しいと思います。さらに、知識の積み上げで、基礎の上になつて、さらに大学ではどういう高みを目指したいかという、やはり自発的に、創造的、発見的にもっと深い学びへと、自分で学んだ知識を基に組み立てていく力というものをつけていくこと、それが国語での文章力にも繋がってくるのではないかと思います。

そういうことをどういうふうに学生に学ばせていったら良いかというと、やはり今、アクティブラーニングということが盛んに言われていますが、「アクティブ」と「ラーニング」というカタカナ語でいうことによって違った受け取り方がされて来ているように思います。やはり、まずは難しいということに取り組むことも大事ですが、授業のどこかで、自分はこのままでは分かったというような、成功体験を盛り込んでいくことも必要で、それによって、基礎学力に問題のある学生も、主体的な学習へと導いてゆけるようになるのではないかと思います。そう

いう意味で、実質的効果のある入学前教育としていくためには、そういう単発的なイベントではなくて、入学後の初年次教育へとどう移行していくかということが、課題となります。本来の「考えて書く力」です。私の本『大学における書く力考える力——認知心理学の知見をもとに——』（東信堂、平成二十年）のタイトルを見ると、ハウ・ツー・ライト、どういうふうに書いたらうまく書けるか、ということについて書いた本というように思われることもあるのですが、そうではなくて、大学での学びとは何かとか、書くことを通して考える力をどう育成したらいいか、というようなこと書いたものです。第十章に先ほどご紹介した例も載っていますので、ご関心のある方はどうぞご覧下さい。

大学でのライティング教育の三要素

「ライティング教育の歴史に見る大学教育のユニバーサル化」ということですが、五〇パーセント以上を超えて、大学に誰でも入学してくるということになると、ある一定層の人たちが大学に入学していた時代とは違って、読み書きに不安がある学生が入って来ているという危機意識が既に一九八〇年代に芽生えています。「大学のライティング教育の歴史」は、大学教育学会の課題研究として取り上げられています。「読み書き教育への問題意識の芽生え」が一九八〇年代に出ています。九〇年代には、正規の科目として、日本人のための「日本語表現科目」が立ち上げられます。そして二〇〇〇年になりますと初年次教育が普及をし、そして今は、ある意味どの大学でも初年次教育、東京大学でも初年次教育をやっているというよう

時代になり、それぞれの大学に合った初年次教育の在り方、あるいは、初年次教育は普及したが、本当にこれだけ時間をかけてやる意味があるのかという、今は、ある意味振り返って、立ち止まり、もう一度考え直す時期に来ているのではないかと思っています。

そこで鍵となるのが、ディシプリン、つまり学問と教養ではないかと思っています。例えば、これから発題される先生方のご発表の中にも、きつとどのように添削をなさっているのか、というような実践があるのではないかと思います。大学でレポート課題を出した、その課題に対して、専門の教員がどこまで対応していくのかというようなことも問題になります。まず、細かく漢字も直すのか、或いは文章のレベルで、文のねじれや主述不一致、或いは文章の構成、引用の仕方とか、「コピペ」に関するいわゆる剽窃の問題、倫理問題ということもあります。それから、専門の授業の課題と授業をやったことと、レポート課題との出した課題内容とがうまく噛み合っているかどうかというようなこととか、看護学校とか、特に専門職になるようなところでは、教育実践もそうですけど、実際にあったことと、あったことに対して自分はどう考えたのかという意見や判断をどのようにきちんと区別して書いているかどうか。何か間違ってしまったというふうなことを、すごく強く思ってしまうと、事実の記述と意見の記述が入り交じったような形で書かれてしまふということもあります。

さらに、論文のような形のレポートになってくると、テーマの設定とか仮説の提示というようなことで、いわゆる研究内容に踏み込んで添削をするということになります。そうすると、

自分が出した、大学教員が出したレポート課題というのは、自分が何を目的として、学生にどういうレポートを書いて欲しくて、しかも提出後に学生に返却されず、学生はそれをどう評価されたかというのは、学期末の成績で見るとは。つまり、大学の教員は、レポートの添削はしていない、私の時代にもそうでしたが、レポートを返された記憶がない。或いは、返されたのは、心理学の実験レポートというのが毎回ありましたので、それは、インストラクターがいたので、その人たちが添削して返すというような形だったので、文章を直すのではなくて、結果の分析の仕方、あるいは結果の統計的な処理の問題とか、そういう内容とか、或いは引用して実験レポートの問題や仮説を設定しているか。そういう方の指導が主に心理学の授業の中で行われていました。

今の学生はそれなりのレポートを作ってきます。というのは、「コピペ」をしてるので、既に出来上がった文章をパッチワークのように切り貼りで作ってくるので、しかもパソコンで作ってくるので、一見整然と見える。しかし、パソコンに習熟していない学生は時々、ここから字体のフォームが違っていると、改行がここから狭まっているから、明らかにこれ「コピペ」のまま出しているではないかというのがわかったりするわけですが、巧みになってくると、「コピペ」はしたが接続詞は自分で考えた、というものもあります。

こうした問題を、「大学でのライティング教育の三要素」（ディシプリン・学習技術・メタ認知）で考えてみます。まず、学問分野の様式が、レポートの書き方に埋め込まれているかどうか。例えば実験レポートだったら、その心理学の考え方に基づいて、

目的、方法、結果、考察、結論みたいな感じで書きます。きつと文学だったらまた別なのだと思いますし、歴史だったらまた違うと思います。そうすると、ディシプリンと、もちろん語のレベル、文章のレベルというような形で、基本的なレポートの書き方の指導も必要でしょうし、或いは最近では、私もパワーポイントを使っているのですが、パワーポイントを配っておしまい、ということになると、学生は、ノートの取り方もわからないままになっている。或いは、先生の板書が汚いからうまくノートが取れないとかという問題もあつたりします。私は、パワーポイントを使っているのですが、パワーポイントを穴埋め方式にしてあつて、そのところは書き入れてね、というような感じで授業をやっています。さらに、よりよく書くためには、自分が書いた文章で、自分がこう書きたいと思ったことと、書き出した表現との間のずれを、もう一人の自分が対象化して、より高い位置から眺めることによって、思考と表現のずれを調整する。その行きつ戻りつ、コントロールとモニタリングを繰り返すことによって、そのサイクルを「メタ認知活動」というのですが、それによって、よりよい文章として繋げていくことが出来る。

大学教育のみならず、中学や高校までにおいても、スキル（学習技術）を学ぶのと同時に、メタ・コグニション（認知）が必要なのですが、さらに、大学教育でのということになると、ディシプリンということが重要であろうということになります。そのディシプリンを入れてみると、大学教育におけるライティング教育というのは今、様々な方法がありますが、ここでは、「大学でのライティング教育の五類型」（学習技術型・専門

基礎型・専門教養型・文章表現型・研究論文型）を設定しました。一つは、いわゆる初年次で行われているアカデミック・ライティングというところで、どのレポートに対しても汎用性の高い書き方を訓練をする「学習技術型」。心理学の実験レポートですと、「専門基礎型」になります。それに対して、専門分野に限らず、多様なディシプリンでの広い学びを重視したレポート、私はそれを「専門教養型」（学びレポート）と呼んでいるのですが、例えば、生涯発達心理学であれば、その授業を通して何が分かったかを、授業で学んだ知識を自分のレポートに反映させながら書くというようなことも重要ではないか。「文章表現型」は、ディシプリンの要素を含まない文章表現指導を目的としたもので、就活等の文書指導等もその中に含まれます。それから卒論などは「研究論文型」として分類することができます。

そうしますと、大学で育むべき「考える力」というのは、こういう自分にとって意味のある知識として、学んだことを組み立て直す力だといえるでしょう。また、「コピペ」の問題は、自分で考えずに盗用することなのですが、学生には盗用の意識がないので、授業の中では、きちんと引用して、自分の言葉で書くことを教えるということと、きちんと調べるということを教えることが、学生自身が自分で考えを、調べた資料をどう組み立てて、自分の意見として提示することが出来るか、ということを支援することに繋がるのではないかと思います。

現在の初年次教育の課題

現在の初年次教育の課題は、初年次に短期集中しているとい

うことと、スキル重視型ということになります。そうしますと、短いスパンの発達で見ていくのではなくて、長い四年間のスパンで国語力の発達というのを見ていくということが重要でしょう。

そうすると、初年次だけではなくて、専門教育も通じて、カリキュラム全体にわたって、ただ、先生から出された課題、レポート課題をこなすだけではなくて、自分は何を知りたいのかとか、大学で学んだことを自分に意味づけて、ちゃんと自分で調べて書けるようになる、意見を言えるようになるというようなことが重要なのではないか。そのためには、スキル学習だけではなく、やはり深い学習。深い学習というのは、調べさせて、その調べた資料を基に自分で考えさせる。考えさせることによって自分の考えを新しく生み出す。或いは、考えたことによつて、自分はこういうことに気づいた。その気づいたことを「知識の再構造化」、つまり、それを論理的にどのように組み立てていくかということをサポートしていくことが重要なのではないか。つまり教員の役割は、教え込みではなく、それを支援していくことなのではないかという理念の基に作ったのがこのテキスト『思考を鍛えるレポート論文作成法』です。第二版でかなり変えました。高校生も登場させながら、根拠に基づき意見を述べることを、問いを立てて論証をすることを大学四年間をかけて学ぶという内容です。この本を作った時に、慶應義塾大学出版会から英語のタイトルをつけて下さいと言われたので、すごく助かったと思いました。というのは、「批判的思考」、「クリティカル・シンキング」(Critical Thinking)を日本語に訳すと「批判的思考」ということになるので、「相手を批判する」ということに対して、日本語の語感からすると、相手の悪口を言う

みたいに捉える学生もいるので、この英文をつけることによって助けられた気がします。

では、そういう初歩的なアカデミック・ライティングと実際のテキストの内容を説明していきたいと思います。まず、小学生に携帯やスマホを持たせるかどうかというところについての議論を通して、自分の経験から自分で考える力を育てるということで、身近な話題を出す。いきなり専門の内容について、中世の何とか時代の何とか哲学についてどう思うか、とか言われても学生はわからないので、こういう身近な話題から入っていくということが、自分の意見、経験から考えを引き出すことが出来るということが重要だと思っています。自分とは異なる意見と批判的に検討することが重要なので、ここでクリティカルシンキングが出て来るわけです。つまり、学生は、「たいへん」とか、「もつ」とか、「すごく」とか言うのと、自分の意見を強調したように思うのですが、「それ、全然説得力ないから」と私は説明します。自分と異なる意見を建設的に検討することによつて、自分の意見の方が正当性がある、妥当性があるということを書くことができます。異なる意見を批判することによつて、自分の意見を強く説得的に述べる事が出来る。これは、私から言わなくても、この前の授業では、「説得的に述べるということは何でしょう」と学生に尋ねましたら、学生は、自分の言葉で、自分とは違う意見より優位に立った意見を述べることによつて、より説得的に述べる事が出来るというような解釈をして説明をしていました。

小学生に携帯やスマホを持たせるという場合には、持たせないという場所を確認出来なくて安全面で問題があります、逆に持

たせないという場合に意見を述べるとしたら、持たせるとゲームや悪質サイト等、管理面で問題があります、というように反対の意見を否定することによって、自分の意見に説得力を持たせることができます。そのためには、きちんと調べる。自分の経験だけではなくて、図書館を活用して。なぜ図書館が必要なのか。先週も宿題を出したのですが、いきなり自分の家で明日宿題しようと思っても出来ないから、と学生に話しました。つまり、データベース、「CZ」とかにアクセスは自分の家からは出来ないの、学校のパソコン室か、図書館から入って、例えば「聞蔵」とか、「日経テレコン」などを調べたりして、説得力のある意見をいくつか調べて来てという課題を出しました。そしたら学生は、「ええ、そうなの」とか言って、図書館のガイダンスを受けていてもやはりわかっていないのです。それで「データベースにはすぐお金かかっているから」と私は言っているのですが、学生たちは「そうなの」みたいな感じでいました。

信頼性のある情報を調べる力をつけることで初めて根拠に基づく科学的な意見が書ける。それは専門教育にも繋がる内容となります。これは実は、第三版とはしなかったんですけど、第三刷というのが今年の三月か四月に出まして、それは三版とするまでには直さなかったのですが、前の第二版よりも、わかりやすくなっています。ご興味のある方はそれをご覧下さい。

初歩的なアカデミック・ライティングの指導例

このテキストでは、レポート・論文作成の5ステップで進ん

でいきます。最後の方には、フォーマットにあてはめて書いていく。それと共に、最後にある自己点検評価シートを、書く前と後に確認をして、何を盛り込んでいくかを考えるということです。レポートには四つの型（説明型、報告型、実証型、論証型）があるという話をしまして、まず今回はどの型の課題が出されたのかを確認する。巻末に付録として、「見本レポート」というものを載せています。「見本レポート」の脇には、間接引用とか、直接引用の仕方、それからタイトルとかキーワードの書き方とか、見出しをゴシック体でわかるように書きましようというふうな感じで、こういうふうに書けば、自分の情報をここにあてはめれば、書けるようになりますという定型表現を用いたフォーマットを、初めての人は、こういう穴埋め方式から始めて、ということです。論理の筋道を表す言葉が並んでいるので、そのバリエーションも、学生は様々な文献に触れることによって、だんだん掴めていくので、まず初歩はそういう定型から学んでいく。そうすると、書けない学生でも、ここにあてはめていけば出来るというように取り組むことが出来る。

批判的に検討することについても、大学生なので自分の感想では駄目だと教えます。テキストでは、まず「批判するなんて人の悪口を言うみたいで私には出来ない」と言っているのに対して、高校生の女の子が「高校生になったのだから自分の服装は自分で決める、自由化することの良いと思います」と言う。そうしたら同じクラスの男の子と女の子が、「でも、高校生になると中学生とどう違うの、基準は何。高校生になるとなぜ自分で決めなきゃならないの、その根拠は、どこまで自由なの、自由であれば制服で行く自由もあり、具体例を示して。

メリットは、デメリットは。他の学生はどう思っているかな」ということで突っ込みが入る。このように突っ込むということは、批判的に検討することなんだよということを教えます。

さらに、データベースを使つて下さい。これだけ多様なツールが図書館では用意されています。体系的でまとまった情報、流動的で新しい情報を調べることができます。そして、三つの手順で調べていきましょう。キーワード検索が重要です。キーワードの組み合わせによって手に入る情報が変わってきます。データベースの特徴についても教えます。

これは、アクティブ・ラーニングによる授業の例なのですが、小学生の例で言えば、まずは携帯を持たせることについて、三十分程度で何も教えずに意見文を書かせます。その後、グループでその意見文を発表して、説得力ある意見には、必要な条件は何かということと話し合わせます。そうすると、批判的に検討することが必要だとか、論理的に演繹的に述べる必要があるのだということが、学生の中から引き出すことが出来ます。教えるのではなくて、学生の中から引き出すということが、教員の役割として大事と思っています。大学図書館員と連携して、データベースの使い方やキーワード検索の実習を行い、根拠となる情報を調べる宿題を出します。それぞれに学生が調べて来た情報が違うので、情報を交換して、情報を整理します。

そして、次に先ほど説明したフォーマットを使つて主題文、このように話題の背景、自分の意見、それから異なる意見、結論としての意見を主張するという形で、引用の仕方も教え、見本レポートを参考に、五章構成で、二千五百字程度のレポート

に纏めるというようなことになりますので、大体A4用紙二枚から三枚分ぐらいになります。完成したレポートは、自己点検評価シートとしてのルブリックでチェックする。チェックだけだと学生はすぐ終わってしまうのです。そこで、相手の良いところと悪いところを記述式で書かせるというのをやっています。自己点検評価シートは、優れているところ、すぐ改善を要するところを文章で書かせる。常に、チェックだけではなく、自分の言葉で書かせるということが重要です。さらにはクラスでプレゼンテーションも行います。

大学四年間のライティングをカリキュラムとして考えてみると、初年次でレポートの書き方をやって、教養教育として様々な学問分野を学び、基礎科目のレポートを書き、最後に研究論文を書くという形に纏められると思います。

また、「論理の流れは砂時計」というようなことを学生に何回も指導の中で話をします。つまり、広く調べていき、自分はこのレポートの中で何を言いたいのかということを決めていき、最後の段階で、これだけのことが分かって来たが、まだこういうことが分かっていないということで広げていく、という砂時計のようなイメージで論理を考えてということ話をしています。

おわりに―学びの力を見通す力と連携する力―

これからの課題です。例えば先ほどのアルバータ大学の例ですが、アルバータ大学では、ライティングイニシアチブとして、つまり先進的な事例として、「Writing Across the

「Curriculum」それをWAC（ワック）と呼んでいましたが、そのWACと言われるのは、いわゆるFDの組織とっていただいて良いと思います。ここにFDディベロッパーの先生がいて、その先生が、例えば、ライティングセンターのところに行って、この正規の授業の中では、どういうことが問題になっているのか、ライティングセンターでは何をやらしたら良いかというようなことを、コーディネーターに伝えます。それから、正規のライティングの授業というのは、101から102というような形で、それぞれ難しさのグレードがついているのですが、実は、全学的にやっているとふうに聞いて調査に行ったら、やはりそうではないことが分かって、文学部だけにこの「Writing Studies」というのがあるというのが分かりました。

でも、この「Writing Across the Curriculum」というのは、授業を提供するだけではなくて、FDとしての役割も担っているもので、先生方に対してワークショップを開いています。どう教えたらいかがということ。ワークショップを開くだけではなくて、調査も行っています。例えば、アルバータ大学だと、医学部とか看護学部というのが特に充実しているらしいのですが、その看護学部には調査をしています。そうすると、看護の先生方が、レポートを自分たちはそれぞれに出しているわけですが、調査してみると、レポートの時期が重なっている、この時期に学生はたいへんだということがわかったというようなことで、しかも形式は、こういう先生もいるし、こういう先生もいるという、全体的に自分たちがどのようにライティング課題を出しているのかということを調査して、そういう資料を提示する。そうすると、上からのFDではなくて、資料を提

供することによって看護学部という組織が、自分たちの組織をちゃんと客観的に見る事が出来て、調整が出来ることになります。でも、ライティングセンターと図書館との連携が大切だとは言っていました。まだ連携はしていませんでした。ライブラリアンは、本当に日本と違っていて、北米のライブラリアンはスペシャリストで、先生と共著で名前を出すぐらいにその分野に詳しいライブラリアンがいて、その先生に情報を提供すると、一緒に論文を書くぐらいのスペシャリストがいるのですが、まだ、このことの連携は十分でないというようなこともわかってきました。

従って、私たちは、四年間を通して学びを見通す力をつけることによって、例えばアルバータ大学の看護学部のように、授業間や先生の間でも連携していくことが出来ますし、一年次だけで教えている先生、三、四年次しか教えない先生。その先生方が、どう学生が四年間で学んでいくのかということが見通せるような大学組織になっていったら、もう少し改善されていくのではないかと。同様に、高校と大学もお互いの様子を知らない。大学も高校の先生方がどういう教育をしているかわからない。でも、例えば今日お話を聞くことによって、まさにこういうことが問題なのだということがわかる。私も実際アルバータに行ったらわかった。訪問したらわかって、話を聞いてみたら、ホームページを見ただけではわからないことがわかった。そこに発見とか出会いがあって、次のことを考えていく、未来を切り開き、改革を進める想像力となり、連携する力となるのではないかと。長いスパンで学生の発達を見通すことで、学生がしなやかに、様々な夢を持って、その足場作

りをするのが教員の役目であり、それは、自分の授業から始まるのではないかと思っています。

司会（吉永安里） 井下先生、ありがとうございます。色々な御研究をなさっている先生方がいらっしゃるので、それぞれのお立場から、井下先生の御発表について、色々な観点で考えられたのではないかと思います。私は、国語教育を専門にしているのですが、幼少接続の研究もしておりまして、接続期の問題として、先生のお話がすごく心に響きました。イニシエーションということ、学習観が前の段階から次の段階へ転換していくということ、学生たちが成長する喜び、自分自身の成長を感じることが大切で、段差をなくしていくということではないということ、また大学の国語力をどういうふうの規定していくかということ。本学部でも入学前教育から初年次教育、さらに、三年生のゼミ、四年生の卒論ゼミというふうに、段階を踏んで学生たちを指導していくときに、我々自身が、先ほど井下先生から御提案のあった、大学のライティング教育の五類型、どの段階に学生がいて、我々がどの国語力を要求するのかということで、色々な指導の仕方があるのだと学ばせていただきました。井下先生、改めまして本当にありがとうございます。

もし、ご質問等ありましたら、井下先生へ、どうぞ自由にご質問いただければと思います。

佐藤広子 貴重なお話ありがとうございました。創価大学の佐藤と申します。今、お話をいただいた中で、私どもの大学にもライティングセンターというのがありまして、そのライティン

グセンターと初年次の授業をどういうふうに繋げていくかというところ、今、色々実践研究をしているのですが、その中で、ケアカンファレンスとか、チュータリングにおいてとか、対話によってライティングにどのぐらい利益が出るかといいますが、さつき添削の問題も出ていましたが、その添削と対話によって、お互いを伸ばしていくという、書いたものを話すことによって伸ばしていくということが、どのぐらい効果があるかと先生はお考えになって取り入れていらっしゃるか。さつきケアカンファレンスみたいなことのお話もあったかと思うのですが、さらにそこから発展して、プレゼンテーションをやらせていると仰っていたのですが、やはりそのプレゼンテーションをやった後で書き直しをさせると、私も今、そういう実践しているのですが、全体の長所を見て、自分の論のどこに破綻があるかとか、すぐにフィードバックが全体から返ってくるので、書き直しが非常によく進むというか、さらにそこから調べがどんどん入って、さらに考えが深まってくなくなっていくのが印象としてはあるんですが、その辺のところ、御実践から、日々、どのようにしていらっしゃるのかを少し教えていただければありがたいと存じます。宜しくお願いいたします。

井下 ご紹介しました自己点検評価シートというのがございます。それを使つてまず、二人一組で、全体を書き終わってからピアレビューをさせるのではなくて、序論の部分には全体像が盛り込まれているので、最初はそこまでを書いて来なさいという課題を出して、その時点で、ピアレビューをさせます。テキストの後ろの部分の初めの部分だけを印刷して、その下に、改

善すべきところと、良いところというのをつけて、それにチェックを入れながら、どこが出来て、どこが出来ていないのかというのを文章化させる。つまり、そのまま、どこが良いか悪いかということを書き直してしまおうと視点が曖昧になってしまふので、視点を明確化させるということが重要なので、ループリックを書く前と、書いた後と、両方に利用しましょうということを書いて、かつ、授業の中でも、全部を通してループリックを使うのではなくて、初めの序論の部分です。序論の部分をまず書いて持つて来させる。その段階で、序論できちんと先行研究を調べているかとか、ちゃんとデータを基にしているかということがよくわかるので、例えば、インターネットだけで、その前の日にやって、これ、信頼性が高くないよね、とか、そういう視点をだんだん学生が持つようになるので、次の時間にまたそれを書き直して持つてくるというような形で、全部書いてから直すというのは、すごくたいへんだなというのは、私はこの何十年かの教員生活の中で、それを感じていたので、最初から出来上がったものを出させるというのではなくて、その序論の部分を書いた段階でチェックをする。そうするとかなり効果があるというふうに思っています。プレゼンテーションについても、ループリックを作っていますので、それに基づいてチェックをさせます。それと同時にプレゼンテーションの時に、毎回学生に紙を配って、一行で良いので、プレゼンした人に対して良いところを一言書いてくださいと言って、次の会にそれを回覧させて、それを見てもらうというように感じて、自分はどういうふうに受け止めたかというのを、それを以て知ることが出来るというような工夫をしたりしています。書き直しでは、

レポートの提出期限を決めます。学生には、一回目の期限のときのレポートを高く評価すると思って下さい。それで、プレゼンテーションをしたあとで、みんなの意見を聞いたり、直して、最終レポートは最終日に提出することも認めます。でも、最終日に提出したものが評価の基準になるのではなくて、その前に出したレポートを高く評価をしますというようにしています。どうしてかというと、そうすると、学生が一回目の提出のときにいい加減なものを持つてくるのです。ですから、まずは提出期限までにしっかりとやる。さらに自分の改善のために、最終レポートを出させて、やはり直すということも大事だと思っています。私は、必ず学生に二部作らせるのです。自分の手元にあるものと私に提出するもの。それで、私に提出したものに、赤入れして返すのです。それを見て直して、最終日までだったら出して良いということになりますと、私が赤入れたものを直したのは、確認してもらうためなので、私の指導によって良くなったところもあると思うので、その前の段階で頑張ったところで評価すると学生に説明をしています。だからといって最終レポートも評価に入れないわけではない。パーセンテージが違おうと説明しています。

吉永 ありがとうございます。もうお一方ぐらい、井下先生に御質問あればと思うのですが。

新川 壯光 御発表ありがとうございます。私は、東北大学の大学院に在籍し、同時に今、東京の高校の国語科教員をさせていただいているのですが、ループリックの活用とか、書く力の

育成というのは、大学に入学してからと、入学前の高校生さんに一部、ブリッジスクールのような形でやられているというようなお話を伺ったのですが、ルーブリックの活用とか、高校に入学段階の生徒にやられる場合と、大学に入学した学生にやられる場合、生徒、学生の理解力というか、利用について差があるというか、工夫した方が良い点というか、高校で使っていく場合に、先生が指導されてきた中で、気付かれたこととかがあったら教えていただけたらというのと、色々御著書とか資料でも御紹介いただいているのですが、高校の授業、大学での学びというふうに、参考になるものがありましたら、アドバイスをいただけたら幸いです、宜しくお願いいたします。

井下 高校生にとっては、身近な話題を探していく、身近なことをテーマにしていくということが重要だと思います。つまり、取っつきやすいものというか、しかもそれが、自分の意見が反映出来るということと、それに関するものがインターネット上に様々な情報があって、学生が調べることができるものであること、例えば、高校生の場合だと、「CINJE」にアクセスすることとは難しいですし、それから論文を読むという力まではいかないと思います。でも、新聞を読むことは出来ると思うので、その新聞を調べる形で対応できるような課題を与えていくことによって、さきほどご紹介したテキストを使って書くことは高校生でも十分出来ると思います。それが例えば大学の小論文を書く力にもしっかりと繋がっていきますし、それから大学の学習にもつながっていくのではないかと思います。それから、入学前教育は、本当に短い期間ですので、レポート指導ということこ

ろまでは行きません。今回は、授業を行うことを想定してお話ししました。

